# 北千島の海に生きる人々

# 多川潔略年譜

明治三十七年一月二十五日、北海道函館市若松町に生れた。

多川潔は筆名、本名は大多留吉、父と母は石川県河北郡の生れ、父は武士の家に生れたが、藩の瓦解の直後、その父も死亡し、漁師の家に養子となり、母は僧侶の二女として生れ、明治十年九月父と婚姻し、翌年、北海道に移住したのである

**重なる作品**

昭和五年十二月号の文芸戦線に小説「犠牲」が発表された。

労農文学雑誌には「失業登録者の群」小説文芸には「この姿を見よ」「求める家」など発表。


昭和三十五年一月二十一日印刷
昭和三十五年一月二十五日発行

価二〇〇円
〒三〇円

著者の了解によつて検印紙を省略します

著者　多川潔
東京都千代田区神田神保町一ノ四六

発行者　中村要松

印刷者　美成社印刷所

東京都千代田区神田神保町一ノ四六
美成社

発行所

東京都町田市相原町一、二〇六
小説文芸社
振替口座　東京五〇四九五番

発売所

多川　潔

この世の中では、具体的な真理を示す人はすくない。
口先ばかりで、社会的正義を叫んでいる指導者だけは、
おのずから、くらしがらくになる世の中である。

著者

日文 701679774

# 北千島の海に生きる人々

多川潔著

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 目　次

北千島の海に生きる人々……七
この姿を見よ……一九四
求める家……一九八

# 北千島の海に生きる人々

## ——鮭鱒の漁場——

### 1

刑事部屋の扉の外へ、戸田健一の身体を、意地わるく突き出しながら、特高係りの刑事は子供でも脅かすように、言った。

「こん度つかまえたら、一週間や十日じゃすまさんぞ。わかったか」

「は、すみません。よく注意します」

「注意しますじゃだめだ……お前がこの辺でうろうろしていると、俺たちにも面倒をかけることになるから、どこか、ほかの町に行ってまじめに働いたらどうだ」

「はい、できたらそうします」

健一は頭を下げながら、答えはしたものの、なにを抜かすか、と憤りをこめて胸の中で叫んでいた。過去をひたかくしにかくして働いていると、どうして嗅ぎつけるのか、刑事がそっとやっ

て来て工場主に、健一の過去をばらして仕舞う。すると、工場主は怖れと憎しみからすぐに、健一を雇解した。そうしたことは、これまでに一再ならずあった。就職と解雇のくり返しだった。だから出来ることならば、特高刑事の眼のとどかない、ずっと海の果てでも、思う存分に働いてみたいとしばしば思ったほどであった。

とに角、健一は一週間あまりの留置場生活から、また町に放り出された。しかし、明日から働くというあてが、全くなかった。彼はすでに、一週間まえまで働いていたカマボコ工場を、解雇されていたのだ。その町に大臣が視察にやって来た。それで、保護検束という名目で特高係りの刑事に検束され、またしても健一が要視察人であることが、工場主にばれてしまっていた。

彼は、間借りしていた二階の六畳で、くたぶれた身体を横たえていた。とは言うものの、気が気でなかった。懐には一銭もなかったし、もちろん貯えのあろう筈はなかった。でもその窮境に、わずか一筋にしろ光明を、投げかけてくれるものはあった。二十六歳を越して、いくらも経っていない若さと、病気ひとつしたことのない頑健さだった。

健一は北海道の函館から、東へ十八里あまり離れた根田内という漁村で、七人目の子として生れた。父は貧しい漁師であったが、大金持になろうという野望に燃え立って、石川県の或る漁村

から母と一緒に、その村へやって来たのだった。ところが、思いもかけず次から次へと子供が生れるので、生活はいつも貧しかったのだ。

健一の少年時代で、いまでも一番かなしかった思い出は、小学校の三年になったときのことであった。父は北千島の鱈場に雇われて行った。半年経って、少しまとまった金を掴んだ父は、喜び勇んで家へ帰って来た。ところが、それを待ちかまえていた米屋の旦那に、金をそっくり払わされてしまったのだ。大きないろりの横に、がくんと膝を折って坐った父の眼には、無念の涙がいっぱい浮んでいた。そばに坐っていた母も、よほど口惜しかったに違いない。大粒の涙をぬぐをうともしないで、唇をかみながら米屋の旦那の顔を、じっとにらみつけていた。ふだんは、おだやかな母親であった。それだけに、きつい顔を見たときには、健一の胸はせつない悲しさで、はり裂けそうだった。

健一は九歳になるかならぬ頃から、夏になると父や兄に連れられて、十人のりの川崎舟に乗せられた。恵山の岬にある燈台の沖へこぎ出し、いか釣りをやるのだ。乗った舟が沖へ出て、少しでも波が高くなると、健一はすぐに舟酔いするので、いやだった。たちまち顔中がまっさをになり、胃袋にあるものが全部吐き出された。その苦しみは、全身から血を絞られるようであった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

しかし、家の暮しの苦しさがおぼろげにもわかると、それを堪え忍んで沖へ出かけた。苦しい舟酔いも幾度か経験するうちに、海にもなれて舟酔いはしなくなった。

その沖で鳥賊のつれる時期は、七月の中旬から十二月の下旬までだった。そして時刻は日没から夜明けまでであった。月の出や、或は主だった星の現われる頃には、その海底で鳥賊が泳いでいるとすれば、必ず水面に浮んで来る。それが、幼い健一には、不思議でならなかった。父親にもそのわけを訊ねてみたが、首をかしげて考えていた父親は、「わかんねえ」と、いかにも面倒くさそうに、答えただけだった。

小学校を卒業する頃には、健一の鳥賊つりの腕もぐっと上達して、収獲高ではどの漁師にも負けなかった。一晩で三千匹の鳥賊を、つり上げたこともあった。

東京の大学を卒業して、村長の息子が村に帰って来た。彼は、禁じられた思想の本や、小説本を持っていて、健一にも喜んで貸してくれた。健一はそれらの本を、むさぼり読んだ。そして仲間を集めると、読書会を作った。やがて昭和六年を迎えると間もなく、函館へ出た。そこのドック会社に、就職して働いた。たまたま健一が書いた小説が、左翼の文芸雑誌に発表されたのは、昭和六年の秋だった。もちろん、戸田輝雄の変名であった。若い健一の胸は、喜びにあふれた。

いつしか憧れていた希望の階段を、登りはじめた気がした。

が、それをさえぎる黒い手は、意外にも早く彼の行く手に立ち現われた。特高警察の眼が、うるさく身辺につきまといはじめたのだ。間もなく、ドック会社は追つ払われる羽目になった。そのことは、故郷の村の人達にも、つぎからつぎえと知れ伝わって、ひそかに赤と噂されるようになっていた。

失業した健一の生活は、当然ながら苦しくなった。おいそれと、就職の口はなかった。夏がやって来た。彼は、村に帰ってまた鳥賊つりをしようと思い立った。

で、父にさっそく手紙を出した。が、何の返事もなかった。かわりに、一番うえの兄から、長い手紙が来た。しかし、その手紙も、健一の窮状を救うものではなかった。父は、お前が赤になったので、村の人たちにも口ぐせのように、すまないと言っている。だから帰らぬ方がよい。思うに、この世の中では、親が貧乏すればその子供たちも、貧乏をしなければならないように、運命ずけられている。だから、自分たちの生涯は、貧乏からはじまって、貧乏で終るだろう、と書いてあった。

が、健一は、兄の手紙の文句を、そのまま信じたくはなかった。反対に、自分が生きているう

ちにきっと、働く人々にとって平和で幸福な生活が、出来る世の中が実現されるに違いないと固く、信じないではいられなかった。

とは言え、日に一度しか出来なくなった食事が、二度、三度にふやせるわけではなかった。健一は、絶望的な空腹をかかえながら、警察をにくんだ。工場主を呪った。

そうした或る日のことであった。

故郷で、幼いときから親しかった、山田信七という友人がやって来た。彼は、健一の境遇を、親兄弟よりもよく理解し、同情してくれた。山田は、健一の顔を見ると、いきなり言った。

「どうだい、北千島の漁場さえくべ」

健一は、はやる胸をおさえながら、ためらいを口調にあらわして、訊ね返した。

「行きたいが、俺は警察からの注意人物だぜ。会社で雇ってくれるかなあ」

山田はニタリと唇に微笑を浮べながら、ともなげに答えた。

「君はまだ大物になっちゃいねえ。なまらはんちゃく（中途半端）だから、名前を変えればわかんねえだ。なんなら俺の友達の名前を使いばええべ（よいでしょう）。俺にまかせろ、船頭に頼んでやるからな」

山田は、さも自信あり気に、右手で自分の胸をポンと叩いて見せた。

健一は、山田の奔走のおかげで、八木漁業会社の漁夫に雇われた。その会社と契約したのが、昭和八年の十二月一日であったが、さすがにそこまでは特高警察の眼も、とどかなかったのであろう。翌年の四月十五日の出発を、こともなく迎えた。彼は漁夫の姿で、十三人の漁夫と一緒に、函館の西浜町の岩壁から、サンパ舟に乗り込んだ。丁度、午前十時ごろで、健一は二十七歳であった。

## 2

巴の形をした函館の港の空には、後から後からと大きな雲が飛んで、四月中旬とは言え、大気は身ぶるいするほど冷たかった。港を抱くようにして、津軽海峡に突き出ている函館山は、さながら蝸牛(かたつむり)が眠っているような恰好でうずくまっていた。その頂上には、一般人は足も踏み入れられない、神秘にとざされた要塞(さい)があった。山の麓は住宅街であったが、東の方には有名な立待岬があった。そこには、東海の小島の磯の白砂に、われ泣きぬれて蟹とたわむる、と刻んだ石川啄木の墓もある。立待、とはアイヌ語だった。その意味は、アイヌが魚を待ってとらえた場所、と

も言われていた。また、帰らぬ人を待ちわびて、ついに海へ身を投げた純情な、アイヌの乙女を偲んだ名前とも、言い伝えられている。

港内に碇泊している大小無数の船舶は、風と波でゆれていた。波止場には、横着けになった、発動機の漁船がずらりと並んでいる。荷揚人足たちは、波止場のあちこちで、群をつくって忙しそうに、荷を運んでいた。木造建の倉庫へ、よいしょよいしょとかけ声を合せながら、運び込む人足たちの長い行列も見える。彼らが肩にかついだ箱の中には、五貫匁あまりの魚が、びっしりつまっている筈だった。ドック会社の方から、鉄板をなぐりつける痛高い音がひびいて、それが港の空高くへ舞い上っていた。小山のようにどっしりとうずくまった巨大な汽船から、錨を巻き上げる骨を砕くような音も聞えて来た。

一八五四年の三月に、この函館の港は、下田港と一緒に、ペルリ使節とむすんだ開港条約で、開港場の一つにされた。そのときからあまねく世に知られて、今では日本の香港とまで言われ、それに、北洋漁業の根拠地ともなっていたのだ。

健一たちが乗ったサンパ舟は、ランチに曳かれていた。汽船と汽船との間を、いそがしそうに突っ走って、間もなく三千噸あまりの汽船の横腹に、ぴったりと吸い着けられた。汽船の甲板を

船員たちが靴音を鳴らして、かけまわっているのが見えた。健一たちが甲板へ上って行くと、マドロスパイプを唇の横にくわえて、ぎろりと眼を光らせた四十前後の船員が、立っていた。彼はパイプを唇から離すと、皆がびっくりするような大声を、張り上げた。

「おい、お前たちはこっちだ」

彼は先きに立って、艙口の鉄梯子を下りた。健一たちは、その後につづいた。そして、新しい筵の敷いてあるうす暗い船底の、広い場所へと案内された。異様な臭気が、むんむんと健一の鼻を刺した。その臭気は、かぎわけるまでもなく、くさった魚と糞尿をまじえたものだった。

健一たちの船頭になった油本は、こうした場面にいく度も経験が、あるらしかった。彼はなるべく広い場所をとろうとして、担いで来た大きな竹行李を、そこのまん中にどすっと投げおろした。やがて中から、大きなローソクを取り出して、パッとマッチをすった。ヂリヂリと火が跳ね上ると、運んで来た身廻り品のつまった荷物や酒の一升びんや、さては焼酎びんや、輪になって坐った健一たちの顔などを、あかあかと照らし出した。

そこへ、太平洋漁業会社と日魯漁業会社の、漁夫や雑夫たちが二百人あまり、がやがや騒ぎながら鉄梯子を、降りて来た。彼等も健一たち同様に、身廻りの荷物を、担いだり横にかかえたり



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c